

第4章 まちづくりの経過と地域活動の現況

1. 文化遺産を活かしたまちづくりの経過

日南市を代表する観光地で、南国情緒漂う日南海岸は、戦後の早い時期から宮崎交通の岩切章太郎が中心となって沿道修景が実施された。海外旅行が困難であった昭和30年～40年代には、日南海岸を中心とした宮崎県南部は、爆発的な新婚旅行ブームに沸いた。そのほぼ中央にある鵜戸神宮は、海幸・山幸神話の舞台ともなった歴史の古い神社である。念流・陰流の剣法や薩摩琵琶発祥の地としても名高い。日南市民にとって、早い時期から日向神話に彩られた美しい自然景観と由緒ある文化遺産が、観光資源として価値あるものであると認識されていたのである。



国定公園日南海岸ポスター S30年

この延長上に、飫肥城の復元や城下町の歴史的風致を活かしたまちづくりがある。もともと島津氏の所領であった飫肥は、天正15年(1587)の島津氏に対する秀吉の九州攻めで案内役を務めた功績により、伊東祐兵が飫肥の地を与えられた。伊東家は、豊臣家滅亡後も徳川幕府から同地を安堵されて、江戸時代を通じて伊東家が飫肥藩(現在の日南市と宮崎市南部)を支配した。その後も、戦災や高度経済成長期の乱開発もなく、飫肥城下町は、飫肥藩伊東家の歴史を色濃く残した町並みとして存続し続けた。昭和50年前後から全国的な町並み保存の機運の高まりと軌を一にして、日南市でも飫肥の歴史的風致を活かしたまちづくりが本格的に始まった。昭和49年(1974)からの飫肥城復元事業は、官民協働の文化遺産の保存活用事業であり、昭和52年(1977)の重要伝統的建造物群保存地区の選定は、九州で最初という快挙であった。

このように、日南市では、まず飫肥を中心とした取り組みがあった。その後、昭和63年(1988)になって、油津地区でも埋立の危機にあった堀川運河の保存運動が立ち起こり、市民からマスコミ、そして県行政までを動かして、堀川運河の整備事業が開始されることになった。

さらに、油津赤レンガ館の買収保存など、市民主体による文化遺産を活かしたまちづくりが展開することとなる。さらに、伝統的な帆掛の漁船であるチョロ船を復元して、各種祭りやイベントでの乗船体験を実施したり、文化遺産を見て回る町歩きクイズラリーが行われるようになった。

こうした動きは市内各地に広がることになる。平成6年(1994)に結成された「やっち

みろかい酒谷」は、地域に残された文化遺産に目をつけた。それまであまり注目されることの無かった坂元棚田や大谷橋を素材に、各種イベントを仕掛けて、大きな反響を得た。

飫肥でも、「飫肥楽市楽座」が結成されて、飫肥城内の石段でコンサートを行なったり、武家屋敷通りでの人力車の無料試乗体験など、歴史的風致を活用したイベントを積極的に始めた。

鵜戸地区では、「鵜戸山をかつとしやる協議会」や「若衆会」が誕生し、鵜戸神宮や周辺の文化遺産を活かした地域おこしが始まった。

このように、市内各地で歴史的資源を再発見することにより、新たなまちづくり活動が開始されていった。

■日南市の歴史的資源（100選等）

年度	名称	所管	選定内容
1955年	昭和30年 国定公園	環境省	日南海岸国定公園
1977年5月12日	昭和52年 重要伝統的建造物群保存地区	文化庁	飫肥伝統的建造物群保存地区
1996年	平成8年 歴史の道百選	文化庁	飫肥街道
1999年7月26日	平成11年 日本の棚田100選	農林水産省	坂元棚田
2005年6月	平成17年 『九州遺産 近現代遺産編101』	国土交通省九州運輸局	坂元棚田
2006年2月13日	平成18年 日本100名城	財団法人日本城郭協会	飫肥城
2006年2月17日	平成18年 未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選	水産庁	油津(堀川運河・杉村金物本店・チョロ船)
2006年3月8日	平成18年 第13回「優秀観光地づくり賞」金賞総務大臣賞	社団法人日本観光協会	飫肥城下町
2006年5月9日	平成18年 日本風景街道 —シーニック・バイウェイ・ジャパン—	国土交通省	日南海岸きらめきライン
2007年2月18日	平成19年 美しい日本の歴史的風土100選	財団法人古都保存財団	伊東家城下町飫肥と港町油津
2007年11月20日	平成19年 地方自治法施行60周年記念総務大臣表彰	総務省	飫肥の歴史的景観を活かしたまちづくり・景観形成推進事業(油津)・日南いいもの発信事業・日南市企業誘致成功報奨金制度
2008年2月7日	平成20年 第20回岩切章太郎賞	宮崎市	飫肥城下町・港町油津・鵜戸神宮・坂元棚田
2008年11月6日	平成22年 2010年度グッドデザイン賞日本商工会議所会頭賞	財団法人日本産業デザイン振興会	油津堀川運河整備事業・
2010年11月10日	平成22年 2010年度グッドデザイン賞日本商工会議所会頭賞	財団法人日本産業デザイン振興会	日南市から発信する飫肥杉プロダクト・
2011年2月5日	平成23年 土木学会デザイン賞2010最優秀賞	土木学会景観・デザイン委員会	油津 堀川運河

2. 地域活動の現況

(1) 飢肥の文化遺産を活かしたまちづくり

飢肥藩伊東家5万1千石の城下町飢肥は、江戸時代初めの地割りを現代までそのまま残していたことから、石垣や生垣、門など武家屋敷の歴史的景観をよくとどめており、関係者から高い評価を受けていた。しかしながら、日南海岸を訪れていた多くの観光客が、市内の飢肥まで訪れることはほとんど無かった。そのため、昭和49年(1974)から飢肥城復元事業に取り組み、昭和51年(1976)に飢肥藩の藩校であった振徳堂の改修、昭和53年(1978)に大手門の復元と歴史資料館の建設、昭和54年(1979)に書院造り御殿としての松尾ノ丸を建設した。さらに昭和52年(1977)には、九州で最初に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けて、飢肥城と城下町の歴史的資源を活かしたまちづくりが本格的にスタートした。

このうち飢肥城復元事業では、「飢肥城復元促進協力会」を発足させて、市民の募金等によって事業費の多くをまかない、その後全国の市民募金によるお城復元ブームのモデルともなった。

平成5年(1993)には、再び市民の募金によって、「国際交流センター小村記念館」を建設した。明治時代を代表する外交官として、ポーツマス条約の締結や関税自主権の回復を成し遂げた小村寿太郎は、飢肥出身の偉人で、小村寿太郎の「誠の精神」は、日南市民の目指すべき人物像として市内小中学校の教材にも取り上げられている。

重要伝統的建造物群保存地区の保存事業では、昭和52年(1977)から今日まで、旧伊東伝左衛門家、旧山本猪平家、小村寿太郎生家等の改修整備を含む143件の修理・修景を実施しており、城下町の歴史的風致を着実に保存・向上してきた。

近年では、飢肥楽市楽座の城内コンサートや、飢肥にあかりを灯す会のキャンドルナイト、祐兵クラブの人力車試乗体験、おびまゆの会のひな祭り、小京都の会の花飾りなど各団体がさまざまな活動を行っている。なかでも、平成12年度から活動を開始した日南市観光ガイドボランティアの会は、年間1万人以上に無料ガイドを行っており、飢肥観光の大きな柱となっている。

平成21年(2009)からは、飢肥城由緒施設の指定管理者である財団法人飢肥城下町保存会が、城下町の商店会に呼びかけて、飢肥城下町「食べあるき・町あるき」事業を開始した。飢肥城下の協



キャンドルナイト
(飢肥に灯りをともす会)



人力車(祐兵クラブ)

賛商店 41 店舗（平成 23 年 2 月現在）で、600 円で 5 品の商品を食べたり、買えたりできる事業である。幸いにも、平成 21 年（2009）10 月 10 日から、J R 九州が飫肥杉によって改装された観光特急「海幸山幸」号の運行を開始したこともあり、飫肥城下町を散策する人が目立って増えてきた。

こうした行政・民間の取り組みは、第 13 回優秀観光地づくり賞金賞や岩切章太郎賞の受賞、日本 100 名城、美しい日本の歴史的風土 100 選に選定されるとともに、NHK 連続テレビ小説わかばの舞台になるなど、高い評価をうけるようになってきた。



食べあるき・町あるき

（2）油津の文化遺産を活かしたまちづくり

港町油津は、江戸時代前期に開削された堀川運河沿いが、明治時代から飫肥杉の集積場となって、西日本はもとより中国大陸まで輸出されていた。油津港は、大正 6 年（1917）に、農商務省から九州で唯一の漁港指定を受けて整備が進み、昭和初期には東洋一のマグロの水揚げを誇るようになった。さらに、大正時代には宮崎県で最初の軽便鉄道や上水道も敷設され、宮崎県でもっとも活気ある町として栄えてきた。

戦後は市街地拡大と漁業不振によって、港に近い旧市街地は衰退の兆しをみせ、杉村金物本店や堀川橋、油津赤レンガ館など、当時の繁栄を示す建物群は手つかずのまま残されていた。また、堀川運河は戦後の高度経済成長期における生活排水や工業廃水によって汚染が進み、昭和 50 年（1975）には埋め立てられることが決定された。しかしながら、歴史的資源である堀川運河の埋立を惜しむ市民が、昭和 63 年（1988）から「堀川運河を考える会」を結成して、保存を呼びかけた。その結果、多くの市民が運河の保存を支持して、5 年後には埋立から一転して県事業による整備（歴史的港湾環境創造事業）が開始されることとなった。

平成 5 年（1993）には市民の手による地域の歴史と文化の再発見運動ともいえる『油津—海と光と風と—』の出版、平成 7 年（1995）には、やはり市民有志の油津みなと街づくり委員会による『蘇れ油津 港と運河のまちづくり計画』の策定が行われた。平成 9 年（1997）には、その計画の対象となった赤レンガ倉庫が取り壊しの危機に瀕し、市民 31 人が 1 人 100 万円ずつ出し合って買取保存を行うなど、市民主導のまちづくりが進んだ。

さらに、伝統的な木造の漁船「チョロ船」が昭和 30 年代に無くなってしまったのを惜しむ市民



油津赤レンガ館（改修前）

が、平成12年(2000)に寄付金を出し合って復元した。

こうした市民の活躍に加えて、平成14年(2002)からは市民と行政、専門家が協働して油津・都市デザイン会議を開催するとともに堀川運河整備方法の見直しを行い、歴史的資産である石積み護岸を修理、復元することで、本物を活かした整備事業を推進することになった。また、市事業として街路整備も同時に開始され、市民やまちづくり団体等も巻き込んだ歴史的景観を活かしたまちづくりが始まった。

平成19年(2007)には、堀川運河整備のシンボルとして、飫肥杉で造られた屋根付き木橋が完成し、市民による実行委員会を結成して、市内小中学生のメッセージを部材に書き込むイベントや橋の愛称募集、完成祝賀会等が行われた。翌20年(2008)には隣接する広場も竣工して、夢見橋・夢広場竣工イベントが盛大に行われた。平成17年度からは漁港環境整備整備事業計画も策定されて、堀川橋より南側についても、上流側と同様に石積み護岸を修理、復元する工事や、大正10年(1921)に完成した第一突堤の復元整備が開始された。

さらに、平成17年(2005)には宮崎県で最初の県知事の同意を得た景観行政団体となり、景観条例の設置や油津の景観計画の策定などの施策も進めてきた。

このように油津では、飫肥杉とマグロ景気で栄えた頃の活気あふれるまちを再生しようと、早い時期から市民を中心としたまちづくりが進められてきた。このような油津での文化遺産を活かしたまちづくりの取り組みは、「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」や「美しい日本の歴史的風土100選」、「グッドデザイン賞日本商工会議所会頭賞」、「日本土木学会最優秀賞」など、高い評価を受けている。



チヨロ船復元

(3) 酒谷の文化遺産を活かしたまちづくり

日本の棚田100選に選ばれた坂元棚田を有する酒谷は、日南市の西端に位置する中山間地域であり、農業と林業で栄えた地区である。古くから、飫肥(本市)と都城(都城市)を結ぶ交通の要として重要な位置を占めていたが、現在では、人口1,207人(平成22年9月推計)、世帯数549、高齢化率45.38%(平成18年4月現在)と過疎と高齢化が進行する地域となっている。

こうした状況の中で、平成5年(1993)には「酒谷地区むらおこし推進協議会」が発足、翌平成6年(1994)には「やっちみろかい酒谷」、平成7年(1995)には「坂元棚田れんげの里づくり協議会」が発足し、小布瀬滝まつり(後にせせらぎの里酒谷まつり・棚田まつり)を行うなど、まちづくり活動を行ってきた。

平成11年(1999)には、道の駅酒谷がオープンする。この道の駅酒谷は、「酒谷地区む

らおこし推進協議会」が運営を担っており、地元住民も農産物の出荷や雇用などの形で関わり、まちづくりの拠点ともなっている。また、同年、酒谷地区の坂元棚田が「日本の棚田100選」に選定された。平成14年(2002)には交流体験事業として、棚田を活用した棚田オーナー制度を開始し、地元住民だけでなく、日南市全域、また市外の人を巻き込んだ形での事業が始まった。平成18年(2006)には、第12回全国棚田(千枚田)サミットが坂元棚田で開催された。

平成22年(2010)には、それまでの自治会長を中心とした組織「酒谷地区むらおこし推進協議会」を解散し、地区住民や小中学校長、消防団員などで、総務・活性化、安心・安全、生活・環境の3部会による新たな「酒谷地区むらおこし推進協議会」を設立、祭りの開催や伝統芸能継承、交通安全運動、植栽活動などを行って、地域を挙げてのまちづくりに取り組んでいる。



棚田オーナー田植え

(4) 日南市の文化遺産を活かしたまちづくりとその考え方

この他にも日南市内には、森林セラピー基地に認定された猪八重溪谷、日南海岸有数の景観を誇る「道の駅」なんごうや亜熱帯作物支場など、全国に誇るべき地域資源に恵まれている。

これまでも、エコミュージアム南那珂事業として、宮崎県南部のまちづくり団体が行政との協働で地域資源の再発見と活用を目指して連携してきた。また、県南観光ネットワーク推進協議会では、観光関連業界が連携して、やはり地域資源の活用による着地型観光の商品開発やスキルアップに努めている。日本風景街道(シーニックバイウェイ)の日南海岸きらめきラインでは、それらの活動を道路で繋ぐ取り組みが官民協働で実践されている。

さらに、飢肥藩の時代からの特産品である「飢肥杉」が、地域資源として見直されている。これまでは、国産材価格の低迷から、放置林の増加が懸念されてきた。そこで、本市では、市役所内に、「飢肥杉を核としたまちづくり推進プロジェクトチーム(通称・飢肥杉課)」を設置して、飢肥杉を地域ブランドにするとともに、飢肥杉を活かしたまちづくりを推進している。平成22年(2010)には、民間企業と共同開発した飢肥杉製品がグッドデザイン賞日本商工会議所会頭賞を受賞した。

合併を機に、新「日南市」の地域ブランドとは何か、が問われている。地域固有の資源の価値を市民と行政が共有し、市内外に発信していくことが、新市のまちづくりにとって最も重要なことであると考えている。地域資源に磨きをかけて、地域ブランドを確立することこそ、「来てみたい、買ってみたい、住んでみたい」そしてなにより「住んで良

かった」まちづくりに必要である。

本市の高齢化率はすでに30%を超えており、市内でも中山間地域における過疎高齢化の現実は想像以上に厳しい。一方で、前章で述べたような歴史的資源を活かしたまちづくりに関わる市民も多い。市民のやる気やプライドを支えているのは、地域固有の歴史や文化・伝統である。文化遺産は、そういった市民のまちづくり活動にも役立つものであり、これら地域の文化遺産を、保存するだけでなく、まちづくりに活用していきたい。



通り名モデルツアー
(日南市・日南海岸きらめきライン)



飢肥杉製品と夢見橋



ひなまつり (小村生家)



赤レンガ館コンサート



棚田まつり



道の駅なんごうと亜熱帯作物支場